

# LODE



## LODEが関西以外にも 普及しはじめました

平成29年度は、近畿圏だけでなく、東京や愛知、広島からも  
LODEワークショップの実施支援要請を受けました。  
計11回のワークショップを開催し、  
延べ300人以上の方に参加していただきました。



## あなたの地域でも LODEに取り組んでみませんか

生きる力を育む研究会では、LODEワークショップの実施をお手伝いします。  
是非お気軽にお声掛けください。

〒675-1317 兵庫県小野市浄谷町1559-1  
生きる力を育む研究会 代表幹事 藤本真由

電話：090-3898-9421

Email：[ikiruchikara\\_hp@yahoo.co.jp](mailto:ikiruchikara_hp@yahoo.co.jp)

H P： <https://ikiruchikara-hagukumu.jimdo.com>

この冊子は平成29年度JR西日本あんしん社会財団の助成を受けて作成しました。

ロード

# LODE



## に取り組んでみませんか？

### Little people Old people Disabled people's Evacuation

小さき者も

老いたる者も

障害を抱える者も

みんなで避難しよう

みんなで生きて行ける

社会をつくろう



普段から社会的弱者を見守るための  
コミュニティ生成型防災事業の実践

LODE(ロード)を実践していただくための基本手引書

2018年3月

生きる力を育む研究会

この冊子は平成29年度JR西日本あんしん社会財団の助成を受けて作成しました。



## LODE (ロード) に取り組んでみませんか？

昨今、自治体が「避難行動要支援者支援計画」の類に取り組む事例が増えてきました。このこと自体は嬉しいことではないかと受け止めておりますが、その内容を見ると、大半は「既存の福祉施設を『福祉避難所』に指定した」程度のもが多く、実際の災害現場において役立つものかどうかは甚だ疑問であると感じています。既存施設の職員が被災したケース等において、この種の計画はどの程度機能するのでしょうか。

私たちチームLODE (ロード)では、「在宅の避難行動要支援者(以下要支援者と呼びます)に対する支援は、専門家たちの手に委ねられるまでは、住民リーダー等が担う以外にない」との認識・確信のもとに、これまで『弱者見守り型災害図上訓練ワークショップ手法LODE (ロード)』の開発に取り組んできました。平成25年度以来5カ年で百数十回に及ぶコミュニティ現場でのワークショップを行い、試行錯誤を重ねながら“日本中の地域コミュニティにおいて実践してもらえる防災・福祉ワークショップ手法”として練り上げてきたつもりです。

そして『弱者見守り型災害図上訓練ワークショップLODE』は、ついに防災白書にも掲載されることとなりました(平成29年度防災白書のコラムの中に、クロスロード、DIG、EVAG、HUGとともに「災害想定ゲーム」のひとつとして紹介されました)。

もちろん、LODEは、災害想定ゲームとしてだけでなく、平時における要支援者見守り力の強化を目指す地域福祉ワークショップとしての性格も強く持つ手法で、このことがクロスロード、DIG、EVAG、HUGなどと大きく異なる点であることは強調しておきたいと思えます。

LODE は、より使える・役立つ手法を目指して、これからも進化を続けてまいります。ただいま各方面よりいただいている「LODE を自分たちでやってみたいのだが、実施マニュアルは無いのか」との声に対応させていただくべく、本冊子において基本的な取り組み方の解説をさせていただくことになりました。

この機会に、是非LODEに取り組んでいただき、小さき者(Little people)も、高齢な者(Old people)も、障害を抱える者(Disabled people)も、みんなで避難しよう(Evacuation)、みんなで生きていける社会を作ろうという理念を一步でも実現しようではありませんか。

最後に、私たちの活動をご支援くださった、公益財団法人JR西日本あんしん社会財団 に感謝・御礼申し上げます。

2018年3月

生きる力を育む研究会  
代表幹事 藤本 真由(社会福祉士)

岩手県立大学総合政策学部  
教授 倉原 宗孝(技術研究担当)

## なぜLODE (ロード)をお勧めするのか 今一度ご確認、ご理解願います

### ◆『防災士』だけでは地域コミュニティをコーディネートできない

現在、全国で数多の『防災士』が養成されています。これは民間資格ですが、実質は国や自治体も巻き込んだ大きな活動となっているようです。防災士となるためには、災害や防災に関する知識を習得し試験に合格しなければなりませんから、防災知識に明るい人材を生み出すという点に関しては有効な手立てのひとつではないかと思われまます。

しかし、防災士の講座では「地域コミュニティをリード・コーディネートする方法」や「各種の要支援者が抱える困難とそれ等への理解」についてはほとんど学ばないようです(現時点での認識です)。

LODEは、地域住民の方々がコミュニケーションしながら取り組み、進めるワークショップです。ワークショップの時点から“コミュニティのコーディネート”が始まります。

### ◆専門家頼みの要支援者対応に意味はあるのか

災害時福祉の研究者の中には、「福祉従事者や専門家たちや福祉避難所等の既存システムを活用したネットワーク」による対応を検討している方々もいらっしゃいます。しかし、災害発災時には福祉従事者や専門家たちも被災する可能性が高く、計画されている福祉避難所も十分機能するかどうか保証はありません。

LODEでは、「福祉避難所や福祉の専門家たちにつなぐまでの緊急避難時、及びその後数時間～数日間までの避難生活を支援するのは、要支援者の家族とご近所さん以外にないと考えています。民生委員さんの補佐ができる人材、民生委員さん以上に要支援者への対応力がある人材を養成することは、LODE の目標のひとつです。

### ◆要支援者対応が必ずしも十分ではないHUGやDIG

在宅の災害時要支援者と目される方(小学1年生以下の子ども、在宅の要支援・要介護高齢者やその予備軍と目される方、障害を抱える方、その他外国人などコミュニケーションに困難を抱える方等)は、地域人口の15%前後いると思われまます(地域差はあります)。現在、15%の要支援者の参加を得て実施できているHUGのワークショップは、どれだけあるのでしょうか。例えば、近年話題になることの多いADHD(注意欠陥多動障害)やASD(自閉症スペクトラム)の子どもたちや認知症予備軍高齢者の存在等を認識・意識したDIGワークショップは、どれだけ行われているのでしょうか。

LODEでは、初期のワークショップから、「各種要支援者への理解促進」のための解説を実施します。ワークショップの回数を重ねていくことで、「要支援者に対する基本的理解」が住民の中に広がり、深まっていくことを目指します(既に4年間で6回ワークショップを実施したコミュニティで、そのような人材が育ってきていることを確認できています)。

### ◆『平時』にも効果がないと、『防災』だけでは続かない

地域コミュニティの住民たちの関心を『防災』だけで長年惹きつけることは大変難しいことと思われまます。阪神大震災を経験した神戸市においてさえ住民たちの関心・記憶は徐々に薄くなっているようです。ましてや被災した経験を持たない大多数の国民の関心を惹きつけていくことは困難です。

LODEでは、『災害』だけでなく、『平時の要支援者見守り』を重視します。認知症への早期対応、孤独死の防止、消費者被害やオレオレ詐欺被害の防止、虐待の防止、そして犯罪の防止等、災害以上に頻繁に起こる“平時の危機”への対応を呼びかけます。

## LODEはどのような手法か …その目標・狙いをご確認ください

### ◆LODEの目標のひとつは「多様性の理解」

地域コミュニティには様々な年代の住民が暮らしています。

赤ちゃん 幼児・未就学児  
小学生 中学生 高校生  
18歳以上～64歳以下の成年  
65歳～74歳の前期高齢者  
75歳以上の後期高齢者  
90歳以上の超高齢者（今後このカテゴリーが重視されてくると思われます）

このうち、赤ちゃん、幼児、超高齢者、後期高齢者等は“要支援度”の高い年代層と考えられます。

今この冊子を手にしていただいている皆様にうかがいます。

皆さんは、赤ちゃんや幼児に対して、どのような支援・配慮が必要かイメージが浮かびますか。  
最近の小学生は、昔の小学生と違って「自宅の住所を正確に覚えていない」子どもが多いことをご存知ですか。  
また、超高齢者を中心とする高齢者の方々が、一般的にはどのような困難や課題を抱えることが多いかご存知ですか。

また、住民の多様性は年代からカテゴライズするだけでは十分ではありません。生活する上で様々な困難を抱えている方が存在することを認識しておかなくてはなりません。

身体的な困難を抱えサポートを必要とする方々（身体の不自由や障害、病気や難病等）  
意思確認やコミュニケーションのサポートを必要とする方々  
（発達障害を含む知的障害や精神障害、認知症やその予備軍と思われる方、幼児や外国人等を含む言葉が不自由な方）

今一度、この冊子を手にしていただいている皆様にうかがいます。

皆さんは、高齢者の方が、避難所の避難生活の中で、認知症を発症しやすくなることをご存知ですか。避難所の中で、自閉症スペクトラム(ASD)という発達障害を抱える子どもがパニックを起こしやすいこと、対して注意欠陥多動障害(ADHD)という発達障害を抱える子どもが他の避難民の方々に迷惑をかけやすいことに対し、何か対応策を考えていらっしゃいますか。  
何等かの障害を持ってはいるが、本人や家族の意思であえて障害者手帳を取得していない方々が多数いらっしゃることはご存知ですか。

災害時における要支援者への支援、さらには平時の見守り福祉等を考えた場合、上記の程度の知識・認識を住民（とりわけリーダー・お世話役層）が持つておくことは不可欠であると思われます。

### ◆もうひとつの目標は「互助の喚起」

「多様性の理解」に加え、「互助の喚起」がもう一つの目標となります。  
昨今、「公助、共助、自助」という枠組みが語られることが多いのですが、LODEが重視するのは、共助より小規模で、かつ家族だけではない「顔と顔が見えやすい近所さんの助け合い」です。

### ◆目標を達成するための手段は

LODEのステップ毎目標	目標達成に向けた主なメニュー
(1) まずは住民同士がお互いの存在を知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ワークショップへの参加</li> <li>◆ワークショップでの住民情報シール貼り</li> <li>◆ワークショップでの「5年後LODE」情報シール貼り</li> </ul>
(2) そこから一歩進んで知り合いになる	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ワークショップの場で言葉を交わす、会話する</li> <li>◆会食の場で言葉を交わす</li> <li>★要支援者や家族に参加してもらう(ある段階から)</li> </ul>
(3) さらに一歩進んでコミュニケーションを重ねる	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ワークショップの場で、会食の場で言葉を交わす。</li> <li>◆意見を述べ合う。互いの意見に耳を傾ける。</li> <li>★要支援者や家族に参加してもらう(ある段階から)</li> </ul>
(4) 住民が持つ多様性について住民同士で理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆避難行動要支援者について学習する</li> <li>◆要支援者が抱える困難の理解に挑戦してみる</li> <li>◆ワークショップで要支援者個別支援計画を検討してみる</li> <li>★要支援者や家族に参加してもらう(ある段階から)</li> </ul>

★(ピンク色)の項目は、取り組み始めの段階では難しい。多くのコミュニティでは、取り組みが進み、要支援者・家族からの信頼を得られてからの取り組みになるものと想定されます。

### ◆LODEは何度も繰り返すことで効果を発揮する

皆さんは、多くの犠牲者を出した東日本大震災の中で、住民の大半が助かった釜石東中学校周辺コミュニティのことをご存知でしょうか。「釜石の奇跡」という呼び名で有名です。

震災発災時、中3だった若者にインタビューしたところ、「中学3年間を通して15回も逃げる訓練をしました。避難行動を体が覚えていたように思います。」とのことでした。

どんなワークショップも、一度や二度の実施・体験で期待できる効果には限りがあります。上記の(1)～(4)のメニューを毎年繰り返し、繰り返し実施することが重要です。

## LODEワークショップを企画・準備してみましょう

### 1 どんなエリア・枠組みで実施すればいいか

どこでやるか(対象)	目的・狙い
①小学校や連合自治会	LODEの導入や各団体のつなぎ
②自治会・町内会の単位	基本的なLODE
③マンション・中高層住宅団地	基本的なLODE
④子ども会や学校のクラス・学年	子どもLODE
⑤高齢者施設や障害者施設	状況に合わせたアレンジ必要

LODEワークショップの実施を考える最も基本的な対象コミュニティは、表中②の「単位自治会・単位町内会(連合自治会や連合町内会ではありません)」であると思われます。このような最小単位の自治会・町内会の中には戸建住宅が中心の地区、マンションや中高層住宅が混在する地区の両タイプがありますが、LODEワークショップはどちらの地区を対象とすることもできます。

③のマンションや中高層団地は、それだけで単位自治会・町内会となっているケースもありますが、そうではなく②の自治会・町内会の一部という場合もあります。

- ②や③のエリアでの実施は、次のような効果やメリットが期待されます。
- ・顔と顔を合わせて、コミュニケーションを増進させていく上で効果が期待できる。
- ・エリア内の民生委員さんが1～2名であることから、情報のやり取りもしやすい。

一方、①のような広いエリアでの実施にも次のような意味があります。

- ・地域の避難所に学校体育館等が指定されることが多いことから、学校区単位(とりわけ小学校区)での取組みを行うことによって、ワークショップの成果を実際の避難所での生活や運営に生かしやすいと期待されます(しかしこの場合も、②や③の基本コミュニティでの取組みがしっかりと行われていることが前提になると思われます)。
- ・地域の各単位自治会・町内会に、LODEワークショップの導入・浸透を図る際に、そのキックオフワークショップを学校区エリアで実施することは有効であると思われます。

①～③のワークショップでは、多くの地域で“中高年齢層が中心のワークショップ”になりがちです。子どもや子育て世代の参加を得るためには、自治会とは別の単位で補完的なワークショップを実施することも必要でしょう。子ども会やPTAなどをベースとした取組みが期待されます。

## 2 ワークショップの規模と会場等

### ◆図上ワークショップの規模

図上ワークショップの場合、グループ・班別にテーブル(島)を設置し、各島の図面の周りをそれぞれのグループ班員5～10名が囲んで作業することとなります。この人数は、コミュニケーションしやすい人数であると思われます(チームで行うスポーツの場合、1つのチームがバスケットボールの5人、バレーボールの6人、野球の9人、サッカーの11人と、10人程度までが大半です。最大でもラグビーの15人です。10人くらいまでの人数がコミュニケーションを図りやすい規模ではないかと思われます。

島(作業班別テーブル)の数も最大10島程度にとどめたいものです。これは、ワークショップの全体ファシリテーター・コーディネーターが各班の班長(テーブルファシリテーター)とコミュニケーションしやすい規模であると考えられます。

したがって、ワークショップの人的規模は、最大10島程度×各島10人程度＝最大100人程度までが適当な規模であるといえるでしょう。もちろん進行の工夫や会場の設備、あるいは人的な配置によって150人や200人程度の規模までは可能かもしれませんが、それ以上の規模の図上ワークショップは非現実的かもしれません。



集会施設でのワークショップ(30人規模)の事例



学校体育館でのワークショップ(100人規模)の事例

### ◆図上ワークショップの会場

100人を超える大規模なワークショップの場合は、学校の体育館などの利用が考えられますが、体育館の場合広いことから、「ファシリテーターの声が通りにくい」とか「前方のプロジェクター画面が見づらい」などの問題に対応しておくことが重要です。

数十人規模の場合は、公的な施設の会議室や集会室で実施することが可能です。

### ◆必要な会場設備

各島を形成するテーブル(長テーブル2～3卓でひとつの島をつくれます。島テーブルの上にA全版あるいはそれ以上の大きさの図面を配置するスペースが必要です)

人数ぶんの椅子(ひとつの島に5～10脚程度を配置します)

マイク(全体ファシリテーター用、テーブルへのインタビュー・発表用)

ホワイトボード(進行の内容や意見の要約を板書します)

できればプロジェクターとスクリーン(説明は画像や映像を使うことが効率的です)

### ◆案内

参加者を募る場合は2～3ヶ月前の案内と2週間前の案内の、少なくとも2回程度は案内が必要と思われます。

## LODEワークショップを企画・準備してみましょう

### 3 ワークショップで使用する図面等の準備

・対象が戸建住宅が主な地区ならば、コンビニの「住宅地図プリントサービス(有料)」を利用して、対象エリアの住宅地図をプリントアウトして貼り合わせてください。

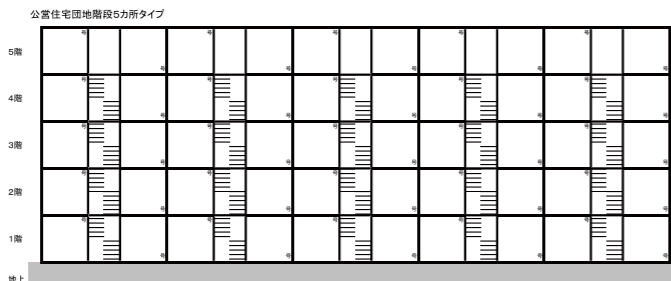
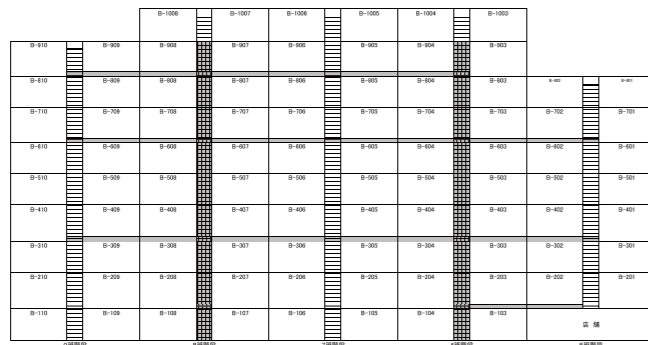


貼り合わせて使用する住宅地図の例



地区現況図を拡大して使用するケースも

・対象がマンションなどの中高層住宅住棟の場合には、エクセルで住棟単位の簡易な戸割の立面模式図を作成してください。それをAゼロ版などの大きな紙面に出力します(大型のプリンターは役所や社協などに備えられていることが多いので、協力を要請してください。また民間でも1枚千円程度で出力してくれるお店があります。



・また、戸建住宅と中高層住宅の混在地区では地域住宅地図と中高層住宅の戸割立面模式図の両方を用意してください。

・中高層住宅のみの場合も、戸割立面模式図に加え、周辺地域を含む住宅地図を用意して下さい。これは、緊急避難場所や避難所の位置や、そこへの避難ルート等を確認するために必要です。

### 4 図上ワークショップで使用する凡例表の準備

・凡例は、地域の特性や必要性に応じて工夫する必要があります。  
 ・前期高齢者の凡例を設けず、「消費者被害に遭った高齢者」の凡例を設けた地域や、「犬を飼っている家」、「猫のいる家」などの凡例を設けた地域もあります。

### 凡例表の事例

<ul style="list-style-type: none"> <li>★ : 自宅(各自の住戸) <small>金色</small></li> <li>● : 赤ちゃん(0歳児・乳幼児) <small>オレンジ色</small></li> <li>● : 1歳以上の幼児(未就学児) <small>黄色</small></li> <li>● : 小学生 <small>水色</small></li> <li>● : 中・高校生 <small>青色</small></li> <li>● : 19歳~64歳の方 <small>緑色</small></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● : 前期高齢者(65歳~74歳) <small>紫色</small></li> <li>● : 後期高齢者(75歳~89歳) <small>赤色</small></li> <li>● : 超高齢者(90歳以上) <small>桃色</small></li> </ul> <p><b>【要支援シール】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● : 身体的な支援が必要な方 <small>銀色</small></li> <li>● : 意思疎通・確認が心配な方 <small>黄色</small></li> </ul>
---	--

支援が必要な方には、『年齢シール』の上に『要支援シール』を少しずらして重ねて貼ってください

### 5 凡例シールやその他文具類の準備

・シールは、百円ショップやホームセンターで安価に入手できるものを活用してください。  
 ・付箋(ポストイット)・・・参加者1人あたり数枚(できれば色も数種類用意)  
 ・模造紙・・・付箋に書いてもらった意見などを貼って整理します  
 ・ラッシュンペン・・・付箋に意見を書いてもらう時に使います  
 ・カラーマジックペン・・・図上で避難行動シミュレーションなどを行う際の記述用に使います。

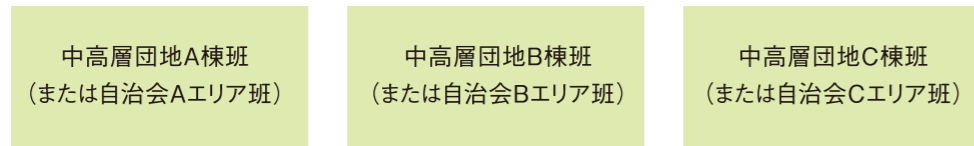


## LODEワークショップを企画・準備してみましよう

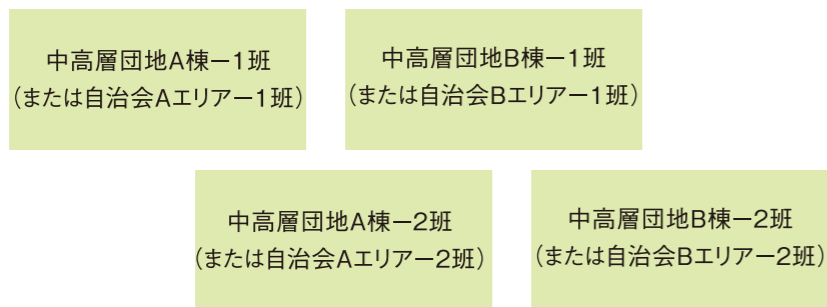
### 6 班分けと「島(テーブル)設定を考えよう (最大で10島程度までになるように設定する)

基本的設定事例を3つ図示しますが、設定のパターンはこの他にも考えられます。

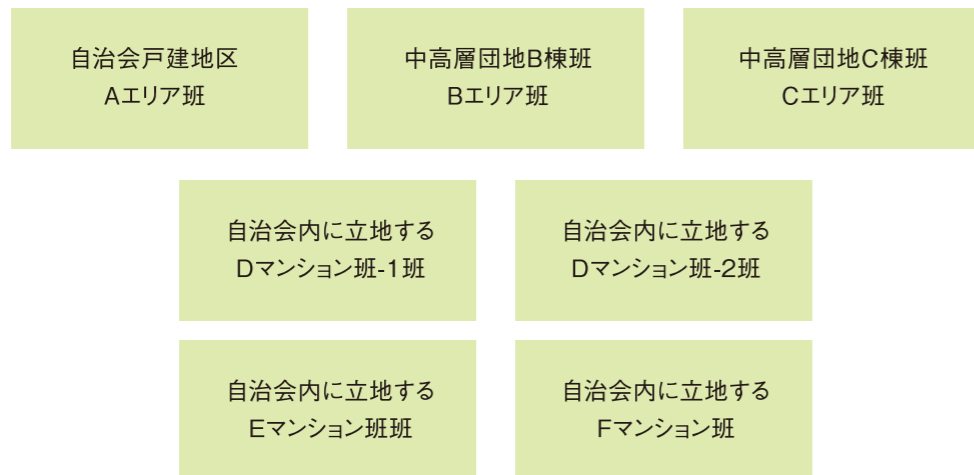
・班(島)の設定事例その1(エリア別に班を分ける)



・班(島)の設定事例その2(各エリアの参加者が多い場合)



・班(島)の設定事例その3(戸建とマンション混在地区の場合)



## 7 基本的な進め方を考えよう(1回あたり標準時間2時間)

LODEワークショップの基本的な進め方を、表に紹介します。

手順	カテゴリ	目的や 具体的メニュー	主な準備物
1	導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ウォーミングアップ</li> <li>・挨拶、メンバー紹介、お互いの自己紹介など</li> <li>●LODEの意味や成り立ちの説明</li> <li>●大規模災害発生時における自助や互助に関して考えてもらう、認識を持ってもらう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆LODEの説明パワポ</li> <li>◆共助や互助が重要であることを示す説明</li> </ul>
2	自助や互助の認識を深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ポストイットで「あなたが自助としてすることは?」や「あなたにとって災害発生時に必要なこと、ものとは?」等を記入してもらい、全員の回答を整理発表する。</li> <li>●東日本大震災時の避難所で高齢者たちが入歯やメガネ等を置き忘れて困っていたことを知らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ポストイット(大)</li> <li>◆ホワイトボード</li> </ul>
3	要支援者について学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●多くの住民は要支援者について具体的な知識が少ない。子ども、高齢者、障害者等に関して説明する。(リーダー層にはヘルパー初任者研修程度知識を目指して欲しい)</li> <li>●要支援者についての説明と併せて、図上作業で要支援者等の情報に対応するシールの種別を説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆要支援者に関するパワーポイントなどでの説明資料</li> <li>◆凡例表</li> </ul>
4	図上作業(情報可視化)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地図やマンションの戸割立面図の上に該当する要支援者等情報のシールを貼っていく。(班別作業が効率的:1班は~10名程度)</li> <li>●他の班との情報交換による補強タイム(お助けタイム)</li> <li>●コミュニティ全体の状況を全員で共有するため、班別に種別毎シール数を発表、その後全体で集計してみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆凡例表</li> <li>◆各種シール</li> <li>◆図面</li> <li>◆ホワイトボード</li> </ul>
5	図上作業(避難想定訓練)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●仮想災害発生の与件を発表する。(災害の種別、場所、規模・程度、日時、気象条件。津波の場合は到達予想時刻と想定規模。火災の場合は場所や規模、現在の状況)</li> <li>●与件のもとで、どのように班員が避難するか、あるいは避難支援(要支援者等)するかを検討し、全員で共有するため、班のまとめを全体に向けて発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆4で作成した図面</li> <li>◆その上にかぶせるビニールシート</li> <li>◆マジックペン</li> </ul>
6	図上作業(5年後LODE)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時間が5年経ったという想定で、年代シールを5年後のものに貼り直す(ビニールシートの上から)。</li> <li>●高齢化の進行を再認識してもらう一方で、新たな担い手に育つ可能性を持つ子どもや若者にも注目してもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆4、5で使用した図面</li> <li>◆凡例シール</li> </ul>
7	要支援者避難支援計画検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>●作成した図中の要支援者を「どのように避難させるか、そのために必要な対応方法や人員は?」について、避難行動支援、避難生活支援の両面から検討してまとめ、全体発表する。【『5年後LODE』とともに、第2回目以降となる可能性が大】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆避難行動支援計画シート</li> <li>◆避難生活支援計画シート</li> </ul>

## 8 段取り表(進行予定表)を作成してみよう

・7の基本的進行計画を基に、詳細な進行予定表を作成してみてもいいかもしれません(進行予定表の作成事例は、次の11~12頁に示します)。

・この進行予定表は、ファシリテーターなどの進行役や世話役が事前打ち合わせに使用し、実際のワークショップの進行プログラムともなります。

・進行予定表には、実施項目(メニュー)順に、予定の時間、目標や狙い、実施内容、ファシリテーターやテーブルファシリテーターの担当や役割、さらには用意する機材や文具・消耗品などを記入しておきます。

・ただし、自由に「アクション・オリエンティッド」な進め方をしたい場合には、無理して作成すべき計画ではありません。計画のための計画であってははいけません。

# ワークショップ進行予定計画表の作成事例

順番	作業1	作業2	作業3	作業4	作業5	作業6	作業7	作業8
所要時間	3	2	5	3	7	5	8	12
時刻	14:00~14:03	14:03~14:05	14:05~14:10	14:10~14:13	14:13~14:20	14:20~14:25	14:25~14:33	14:33~14:45
カテ	導入			自助とは				図上WSの事前説明
タイトル	挨拶	プロジェクトメンバー紹介	プレゼン: 阪神大震災からDIGへそして今LODEへ	ウォーミングアップ	作業: あなたにとって「自助」とは?	プレゼン: 「高齢者三種の神器」他	作業: あなたは避難所のマークが書けますか?	プレゼン: 主な「支援を必要とする方々」
達成すべき目標				プロジェクトメンバーを知り、作業へのウォーミングアップを行う	参加者にまず「自助とは」を考えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	自助の考え方の一例を学んでもらう。要支援者の生命の危険やQOL低下につながるかもしれない事態の一例を学ぶ。	参加者にまず「避難所」の存在を考えてもらう。その結果を全体で整理し、全員で共有する。	要支援者に関する参加者の理解を促す。
生成物		作業しやすい雰囲気	取り組みの意味の理解	作業しやすい雰囲気	参加者たちの「自助」意識を記したポストイット	要支援者支援の考え方に参加者の理解・認識	参加者たちの「避難所」を記したポストイット	要支援者に関する参加者の理解
作業単位	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体	全体
1. 挨拶	スタッフ紹介	プレゼン		作業: 「起きてからここに来るまで何人の方と会話しましたか?」他	作業: 「自助と聞いてあなたは何を想起するか?」を	プレゼン	作業: 「あなたは避難所のマークが書けますか?」を	プレゼン
2. 事前説明 ・研修上の注意 ・記録撮影の事前告知	今回の研修会を運営補助するLODEチームのメンバーを紹介する	次のような内容の説明 ①南部美智代等が阪神大震災後DIGを発売し、さらにそれをLODEへと改良発売した経緯 ②LODE各4文字にこめられた意味 ③LODEはLOVE(隣人愛)をもって行うこと	1. あてはまるところで挙手願います。 ・10人以上の方は? ・5人以上の方は? ・3人の方は? ・2人の方は? ・1人の方は? ・誰とも会話していない方は?	1.Dさんから次のような作業指示 ①「自助と聞いてあなたは何を想起するか?」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	Dさんから、「高齢者三種の神器」や「乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾」などのグッズを披露・説明する	作業指示 ①「あなたは避難所のマークが書けますか?」を3分以内にポストイットに書く ②ポストイットを回収員に渡す	Cさんから要支援者について説明 ①子ども ②ADHDタイプ ③ASDタイプ ④LDなど ⑤その親 ⑥高齢者(とりわけ認知症) ⑦障がい者 ⑧身体 ⑨知的 ⑩精神	
3. メンバー紹介はCさんに回していただく			2. 結果に対して簡単な評価を述べる	2. 回収されたポストイットをEさん、Fさんによって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。		2. 回収されたポストイットをEさん、Fさんによって模造紙上に分類、整理。全体に傾向を報告。	Gさんから発達障害児に関する補足説明	
役割	●司会: Aさん ●挨拶: Bさん	●司会: Cさん	●プレゼンター: Dさん	●プレゼンター: Dさん	●プレゼンター: Dさん ●補助者: Eさん ●補助者: Fさん	●プレゼンター: Dさん ●補助者: Eさん ●補助者: Fさん	●プレゼンター: Dさん ●補助者: Eさん ●補助者: Fさん	●プレゼンター: Cさん、Gさん
観察者	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん
記録者	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん
ツール			●ホワイトボード		●ポストイット大、ボールペン、 ●模造紙(全体で2枚程度)	●高齢者三種の神器入れ実物 ●乳幼児アタッチメントを活用した障害児向け防災頭巾実物	●ポストイット大、ボールペン(人数分) ●模造紙(全体で2枚程度) ●正解となる「避難所のマーク」を大判用紙に説明書きしたもの(パワポ画像)	●LODE説明パワポ前半
場所	某集会施設大会議室							

順番	作業9	作業10	作業11	作業12	作業13	作業14	作業15	作業16
所要時間	5	2	28	10	10	10	7	3
時刻	14:45~14:50	14:50~14:52	14:52~15:20	15:20~15:30	15:30~15:40	15:40~15:50	15:50~15:57	15:57~16:00
カテ	図上WSの事前説明	マンションタイプの図上ワークショップ						結び
タイトル	プレゼン: LODE図上WS作業手順	プレゼン: マンションLODE図上WS作業手順	作業: 住民や要支援者の所在を凡例シールによって示す作業	作業: 班毎に年齢別住民数や要支援者数をカウントし発表する作業	作業: 「図上避難シミュレーション」	作業: 「5年後LODE」図上作業	本日の感想と質疑応答	まとめ・閉会
達成すべき目標	LODE図上作業のシールの凡例に関して理解を促す	マンション戸別立面図を用いた図上ワークショップの手順に関して理解を促す	参加者各自に「自分の周りの住民や要支援者の存在を認識してもらう。顔と名前が一致するコミュニティを目指す」	各班の参加者に、自分たちがどれくらいの住民情報を把握しているのか、要支援者情報を把握しているのか認識してもらう	避難シミュレーションを通して、要支援者への支援・配慮(要支援者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方を認識してもらう)	作業12で作成したコミュニティ図が、5年後にどのように変化するかを図上予想してもらうことで、コミュニティの潜在的脆弱性と可能性を認識してもらう	参加者の本日の感想を明らかにすることで、本日の意義、意味をより確かなものとする	
生成物	LODEワークショップの基本的な手順に関する参加者の理解	マンション戸別立面図を用いた図上ワークショップの基本的な手順に関する参加者の理解	住民や要支援者情報表示・整理方法(立面戸別図での情報可視化方法)の習熟	ワークショップの結果、参加住民たちが持つ住民情報・要支援者情報数を一覧に整理した表	避難シミュレーションを通して得られる、要支援者のタイプによって求められる支援・配慮のあり方に対する参加者の認識	5年後のコミュニティにおける要支援者及びサポーター候補等の情報(立面戸別図)		
作業単位	全体	全体	テーブル別グループ(1~8班)	テーブル別グループ(1~8班)	テーブル別グループ(1~8班)	テーブル別グループ(1~8班)	全体	全体
各凡例シールの意味を説明する	プレゼン	作業: 班のメンバー同士で住民情報や要支援者情報を出し合い、それをもとに、凡例に使用した凡例シールを貼っていく。各住戸に「表札」を書き込んでいく。	作業: 班毎に年齢別住民数や要支援者数をカウントし全体に向け発表してもらう。	作業: 地震発生、その後火災及び津波発生との発生発表の下、図上で各自行動及び班単位での役割分担シミュレーションを行う。	作業: 作業13の成果を下図にして、そこにかきつけた凡例シールの上から5年後の凡例シールを貼る作業	作業: 「本日良かったと思うところ」と「本日課題だと感じたところ」は?	閉会挨拶	
Cさんから凡例シール説明 ①自宅 ②赤ちゃん ③幼児 ④小学生 ⑤中学生 ⑥一般生産年齢 ⑦前期高齢者 ⑧後期高齢者 ⑨超高齢者 ⑩身体的支援が必要な方 ⑪コミュニケーション支援が必要な方 ⑫その他	Cさんから、各住戸に対して次の各人数をカウントして発表するよう促す。 ①自宅: 黄色丸 ②未就学児: 黄色丸 ③小学生: 青色丸 ④中学生: 青色丸 ⑤一般生産年齢: 緑色丸 ⑥前期高齢者: 紫色丸 ⑦後期高齢者: 赤色丸 ⑧超高齢者: 赤色丸 ⑨身体的支援が必要な方: 銀色丸 ⑩コミュニケーション支援が必要な方: 金色丸	Cさんから、各班リーダーに対して次の各人数をカウントして発表するよう促す。 ①自宅: 黄色丸 ②未就学児: 黄色丸 ③小学生: 青色丸 ④中学生: 青色丸 ⑤一般生産年齢: 緑色丸 ⑥前期高齢者: 紫色丸 ⑦後期高齢者: 赤色丸 ⑧超高齢者: 赤色丸 ⑨身体的支援が必要な方: 銀色丸 ⑩コミュニケーション支援が必要な方: 金色丸	①コーディネーターから発表時の与件を発表する(日時、地震規模、天候、火災や津波の発生など)。 ②それに対してグループ単位で、各自の行動やグループでの役割分担を踏まえて避難行動を検討する。 ③各人の避難行動経路をマックペンで図上に線表示してみる。	①コーディネーターから発表時の与件を発表する(日時、地震規模、天候、火災や津波の発生など)。 ②それに対してグループ単位で、各自の行動やグループでの役割分担を踏まえて避難行動を検討する。 ③各人の避難行動経路をマックペンで図上に線表示してみる。	①作業13図の上にビニールシートをかぶせる。 ②5年後にタイムスリップ想定し、ビニールシートの上から「変化の想定される方」のところに凡例シールを貼る。 ③その上で、避難シミュレーションを再考してみる。	①全員に「本日良かったと思うところ」と「本日課題だと感じたところ」を別々の色のポストイットに記入してもらう。 ②ポストイットを回収員に渡す		
進め方			各住戸に「表札」を書き込んでいく	Eさんがその数値をホワイトボード上に記録し、一覧表に作成する。	④班別にリーダーから作業結果を報告してもらう	④コーディネーターや講師が解説する。	③オブザーバーの社協職員から全体の意見を発表。全体意見を受けて講評を述べる。	
役割	●プレゼンター: Cさん	●プレゼンター: Cさん	●全体コーディネーター: Dさん ●補助者: Cさん ●テーブルファシリテータ 各班1名以上(社協・ボランティアセンター職員にお願い)	●プレゼンター: Cさん ●補助者: Eさん	●全体コーディネーター: Dさん ●補助者: Cさん ●テーブルファシリテータ 各班2名以上(社協・ボランティアセンター職員にお願い)	●全体コーディネーター: Dさん ●補助者: Cさん ●テーブルファシリテータ 各班3名以上(社協・ボランティアセンター職員にお願い)	●プレゼンター: 社協職員さん ●補助者: Eさん ●補助者: Fさん	●閉会挨拶: Aさん
観察者	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん	Hさん
記録者	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん	Kさん
ツール	●LODE説明パワポ前半 ●手貼り凡例表シート(テーブルに2枚?) ●コピー凡例シート(各人1枚) ●PC・プロジェクター・スクリーン	●凡例表シート(各班に複数枚)	●マンション立面戸別図(8班分) ●凡例シール各種 ●凡例表シート(各班に複数枚)	●作業12を経たマンション立面戸別図(8班分) ●ホワイトボード	●作業12を経たマンション立面戸別図(8班分) ●マックペンセット(マッキーのセットを各班1セットずつ)	●作業12を経たマンション立面戸別図(8班分) ●上掛けフィルムシート(8班分) ●凡例シール各種 ●凡例表シート(各班に複数枚)	●ポストイット大(2色必要)、ボールペン、 ●模造紙(全体で4枚程度)	
場所	某集会施設大会議室							

## LODEワークショップの基本的な手順

### (1) 導入部分

#### ①【受付、着席】

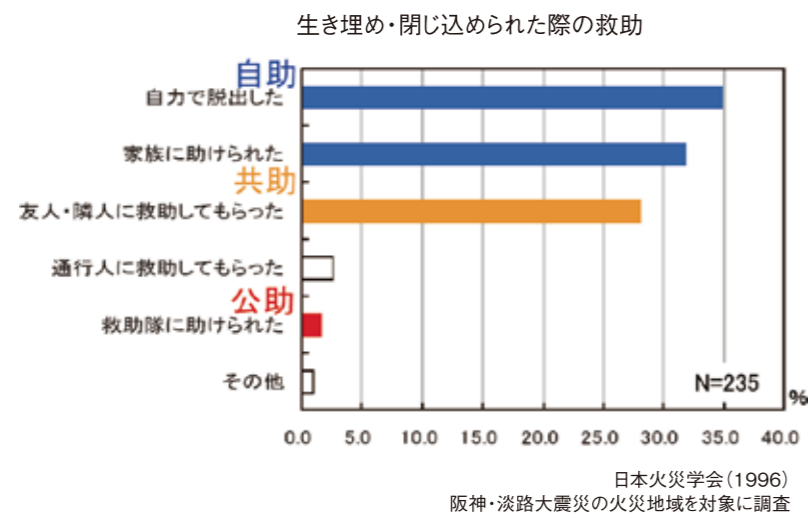
・最初に飲み物や軽食を用意しておくことも有効です。飲食には、緊張がほぐれ会話が進みやすいという効果が期待できます。

#### ②【挨拶・導入、進め方の説明：5分～10分】

- ・住民はあまり長い挨拶を求めています。手短に必要性、目的を語ってください。
- ・お世話役(全体ファシリテーター、補佐役、テーブルファシリテーター(各テーブルのリードをしてもらいます)、さらには社協や行政からの協力者などを全体の場で紹介してください。
- ・全体ファシリテーターは、テーブル上にある図面、シール、凡例表、ポストイット、筆記具などが揃っているか、各テーブル参加者に呼びかけ確認してください。

#### ③【自助・共助・互助について考えてもらう：2～5分】

- ・なぜ自助が、互助・共助が重要かを全体ファシリテーターから説明します。(パワーポイント利用が有効です)
- ・阪神大震災時、救出された人の大半が、自助・共助・互助によるもので、公助によって救出された人は非常に少数であったことを説明します。



#### ④【LODEの紹介と意味の説明：2分～5分】

- ・全体ファシリテーターから次の項目を簡潔に説明してください。
- ・大災害時犠牲になりやすいのは子ども、高齢者、障害者などの避難行動要支援者。
- ・LODEは、地域コミュニティの自助力・互助力の強化を目指す手法。
- ・要支援者を含め住民同士がよく知り合い、理解し合うことを目指す。
- ・LODEは、要支援者が抱える困難への理解を深めることも目指す。
- ・これらによって、防災に対してだけでなく、平時の見守りにも役立つ。

## (2) 自助・互助への認識を深めるための作業

### ①【ポストイット作業その1：あなたにとっての自助とは？：10分程度】

- ◆全体ファシリテーターが、参加者全員に次のような作業指示を出します。
- ・一人1枚ずつ、●色のポストイットを手にとってください。
- ・あなたにとって自助とはどういうこと、どういうものでしょうか。ポストイットに書いてください。
- ・各テーブルのリーダーは班員のポストイット回答を集めて前のホワイトボードのところまで持ってきてください。補助者の方は、集まってきたポストイットを内容で分類し、ホワイトボードの上に整理して貼ってください。
- ◆この後、補助者から参加者回答の傾向について、例えば次のような報告をしてもらいます。
- ・皆さん、「自助とは」という問いかけに対し、「食料や水の備蓄」、「緊急持ち出し袋の用意」というような備蓄系・グッズ系の回答が目立ちます。
- ・また、発災時に命を守るとか、窓やドアなどの出入り口を開けて逃げ道を確保する等の、発災時に命を守る行動が大事だという方もいます。
- ・さらに、家族など大事な人やのご近所さんの安否を確認するといった回答もあります。
- ・災害の程度がどの程度であったのか、情報を確認するという回答もあります。
- ・お互いの意見を聞いて、自分が気づいていなかったところがあれば覚えておいてください。

### ②【ポストイット作業その2：避難場所のマークは？：10分程度】

- ◆全体ファシリテーターが、参加者全員に次のような作業指示を出します。
- ・一人1枚ずつ、■色のポストイットを手にとってください。
- ・全国共通の「避難場所のマーク」をポストイットに描いてください。
- ・避難場所は、急な発災からとりあえず命を守るための場所です。災害は自分の街にいる時にやってくるとは限りません。知らないよその街ではこのマークを見つけるのです。子どもたちにも教えてあげる必要があります。
- ・各テーブルのリーダーは班員のポストイット回答を集めて前のホワイトボードのところまで持ってきてください。補助者の方は、集まってきたポストイットの中から正解、或いは正解に近いものを選んでください。
- ◆この後、参加者に正解を示します。



作業1:「自助とは」の回答整理



作業2:「避難場所マーク」の正解



### (3) 避難行動要支援者への理解を深めるための学習

避難行動要支援者に対する理解を促すことがLODEワークショップでは重要な目的の一つです。住民の中に、認知症に対する初歩的・基本的理解や、各種障がいの特徴に関する初歩的・基本的な理解が進んでいけば、そのコミュニティは日常時から“見守り力のある福祉コミュニティ”へと育つはずで

#### ①【学習その1：子どもについて：5分程度】

◆ファシリテーターによる説明が難しい場合は、子ども、特に幼児や小学生に詳しい方に説明をお願いします。特別支援コーディネーターでもある幼稚園教員や小学校教員、或いは療育施設の職員などをお願いするのが適当だと思います。次のようなポイントをわかりやすく説明してもらいます。

- ・基本的に乳児、幼児と小学校1年生までは自助力が無いと考えなければならない。
- ・その他、小学校2年生以上でも発達障害などを持つ児童は要支援度が高い。
- ・これら、とりわけ心配な子どもは人口の5%内外存在すると思われる(全国平均)。
- ・発達障害の中では、ASD自閉症スペクトラム系やADHD注意欠陥多動障害の子どもが、避難行動中や避難所滞在中にトラブルを起こす可能性がある。例えばASD自閉症スペクトラム系の子どもは、大人数の人がいる避難所ではパニックになる場合が少なくない。また逆にADHD注意欠陥多動障害の子どもは、避難所で走り回って他の人たちの安眠を妨げたりする場合が想定される。
- ・中高学年であっても、昔の子どもより自助力が低くなっているとも考えられる。岩手県立大学倉原研究室が兵庫県伊丹市で調査した結果によると、中高学年のうち、自宅の住所や電話番号を完全に記憶している子どもは全体の3割に満たなかった。

#### ②【学習その2：在宅の高齢者について：5分程度】

◆ファシリテーターによる説明が難しい場合は、高齢者、特に介護や認知症等に詳しい方に説明をお願いします。社会福祉士や介護福祉士、老人ホームの職員などをお願いするのが適当だと思います。次のようなポイントをわかりやすく説明してもらいます。

- ・日本老年医学会から、高齢者の新しい分類が提言されている。准高齢者(65~74)、高齢者(75~89)、超高齢者(90~)。
- ・超高齢者でも自力避難が可能な人もいるが、一方で准高齢者でも認知症等で自力避難が覚束ない人もいる。
- ・介護保険制度で要介護・要支援に認定されている方だけでなく、“予備軍”と疑われる方々に注意・配慮しなければならない。外出する回数が減って閉じこもりがちになった、急に痩せてきた、お茶を飲むとむせる、杖や手すりがないと歩けない、消費者被害に遭った、オレオレ詐欺に遭った。これらは要注意サイン。
- ・急激な環境変化は認知症の原因になる(引越なども)。避難所生活で認知症を発症させないためには、「知った顔に囲まれている」ことが重要。
- ・認知症による問題行動のいくつかは、周りの人々の避難所生活を崩壊させかねないものである(物盗られ妄想や弄便など)。対応策を講じておく必要がある。
- ・在宅で注意や配慮が必要な高齢者も人口の4~5%存在すると想定される(全国平均)。

#### ③【学習その3：障害を持つ方について：5~10分程度】

◆ファシリテーターによる説明が難しい場合は、療育施設や障害者施設の職員などをお願いするのが適当だと思います。次のようなポイントをわかりやすく説明してもらいます。

- ・障害は身体障害、知的障害、精神障害に大別される。また発達障害はその症状によって知的障害や精神障害に含まれる。
- ・一般住民の大半は、「障害者」と聞くと、身体障害者をイメージするようだ。
- ・対して、意思確認やコミュニケーションの注意・支援が求められる知的障害者や精神障害者のことは、忘れられがちである。
- ・詳細な障害の分類・特徴を理解するまでには時間を要するため、LODEでは「身体的なサポートが必要な方」と「意思確認やコミュニケーションの支援が必要な方」の2つに大別してワークショップを行う。
- ・これら、在宅で障害を持つ方は人口の5~6%内外存在すると思われる(全国平均)。
- ・健常者だった高齢者が、被災後避難所の中で障害者になってしまう場合もある。逃げる時に入れ歯を忘れてしまい咀嚼できなくなって、咀嚼障害状態からさらには認知症傾向となる。眼鏡を失くしてしまうと視覚障害状態になる。補聴器を失くしてしまうと聴覚障害状態になる。よって、入れ歯・眼鏡・補聴器は、高齢者防災三種の神器として避難行動時に携帯することが重要である。
- ・障害の状態にはあるが、本人や家族の意思で、障害者手帳を持っていない方もいる。とりわけ精神障害、次いで知的障害の方に多いと思われるが、こうした方々は行政的には障害者としての支援を受けられないことがある。
- ・障害ではないものの、障害者と同じような「身体的な配慮や支援」を必要とする方々が存在する。難病患者や強度の食物アレルギーを持つ方々等である。アレルギーに対応している避難食を常備している避難所はほとんどないといえる。平時から準備・対応しておかなければ命を守れない。
- ・障害ではないものの、「意思確認やコミュニケーションの支援」を必要とする方々も存在する。日本語に不自由な外国人は対しては、幼児や子どもに準じるコミュニケーション支援が必要になることも少なくない。これに関しては、外国人の災害時支援ややさしい日本語指導などの活動を展開している団体が存在する。外国人が多い地域では、それらの団体に支援・協力を要請し、対応策を講じるべきである。
- ・虐待関係にある家族(虐待するものと虐待されるもの)も災害発生時に避難面での不安を抱えていると思われる。虐待の発覚を恐れ、他の住民たちが避難している避難所へ来ない、来づらいという場合を想定しておかなければならない。この問題は、平時からの見守り活動が重要となる。



## (4) 図上作業・・・住民情報、要支援者情報の可視化

### ①【図上作業その1：住民情報、

#### 要支援者情報のシール貼り：20分程度】

- ・要支援者に対する認識・理解を深めたのち、凡例表に従って、コミュニティの住民たちの情報をシールで可視化していきます。
- ・シール貼りの作業は、班の全員で協力しながら行います。この時、ただシールを黙々と貼るのでは意味が半減します。「あそこのおばあちゃん、最近見ないけど具合悪いの?」、「おばあちゃん、要支援になってデイに通っているから最近地区の会合に顔を見せなくなっているのよ」、「あそこのご主人は退院されたいけどまだ療養中で歩くのが辛いいわ」というような自然な情報交換が住民間で行われ、それを共有し始めること、それが重要なのです。
- ・また「お助けタイム」と称して、異なる班と班が情報交換する時間を確保します。



一般の地区でもマンションでも、班作業ではお喋りしながら、住民情報を出し合います。



マンションの住民情報図が完成です。これを毎年作成すると、段々と情報が増えていきます。

### ②【図上作業その2：年代別等住民情報数のカウント作業：10分程度】

- ・各班の作業結果を合計して、住民情報数の一覧表を作成します。
- ・年代別および「要支援」の種別毎に、各班の人数を発表し、ホワイトボード上の表に書き込んでいきます。
- ・この数字は、「この参加者でどの程度の住民の情報数を持っているのか」の目安になります。

年代	要支援	その他	合計
A-60	0	14	14
A-70	0	12	12
B-10s	2	23	25
B-20s	1	35	36
計	3	84	87

年代	要支援	その他	合計
A-1	0	22	22
A-2	0	47	47
B-1	0	52	52
B-2	0	64	64

あるマンションでは、毎年LODEワークショップを開催し、集計表の住民情報数がどれだけ増えているかを確認し、互助力強化の尺度としている。

### ③【図上作業その3：図上での避難シミュレーション：10分程度】

- ◆住民情報、要支援者情報の可視化作業が終わったら、次はその図面の上で、図上避難シミュレーションを行います。全体ファシリテーターから、次のように「与件」が発表されます。
- ・2018年〇月〇日夜〇時、■■■■を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生、この街でも震度6強を記録
- ・「……」が倒壊、「……橋」が崩落、「……」から火災発生。北の風5メートル。
- ・大津波警報が発令、津波の到達予想は1時間後。
- ◆こうした与件に基づき、参加者には図上で、どのような避難行動をとるか、マジックで線表示してもらいます。その上で、班員相互で、或いは他班の方々と評価しあいます。
- ・火災や倒壊家屋を回避して避難場所へ逃げるのができたか。
- ・近くの要支援者の避難に協力できたか。
- ・津波が到達するまでに避難することができたか。
- ◆避難シミュレーションの結果は、発災時刻や風向・風速などの与件が変わるだけで、全く異なるものになります。過去の災害からも学び、いくつかのタイプの与件で何度も実施してみることが重要です。



班の中で避難ルートについて意見を交換する。各人が異なる意見を持つ場合も、そのことを認識するいい機会となる。

年代	要支援	その他	合計
A-1	0	22	22
A-2	0	47	47
B-1	0	52	52
B-2	0	64	64



マンションで、誰がどの要支援者を支援して逃げるかの検討を行った図

小学生が各自宅から避難所までの道のりを図示した。小学生に地図を読ませることは大切である。

## 第2回目LODEワークショップの追加メニュー

おそらく、この項目からは2回目のLODEワークショップでの実施項目になるものと思われます（『5年後LODE』までは1回目でもやれる場合があります）。  
LODEワークショップは、毎年1回、或いは半年に1回というようなペースで繰り返し実施することが重要で、効果的でもあると思われます。

- ◆第2回目以降は、P14のポストイット作業は省略してかまいません。
- ◆P15～16の要支援者理解のための学習は継続、強化してください。
- ◆図上作業は、第1回目同様に行ってください。異なる想定での避難シミュレーションなどを行ってください。
- ◆図上作業の最後に『5年後LODE』を実施してください。
- ◆その後は、同じ班作業で『要支援者支援計画の検討』を行ってください。
- ◆要支援者の困難や不安をより理解するために、療育センターや障害者施設等を通して、障害者（家族）の声をヒアリングしてみてください。

ここまでの内容を毎年実施することができれば、あなたのコミュニティは、見守り力のある福祉コミュニティへと成長するはずです。

## (1)『5年後LODE』の実施

18ページで作業した図面の上にさらに透明なビニールシートを被せます。

「今の住民たちがそっくりそのまま残っているとして、5年後の状況をシールで貼ってください」という条件の下に、ビニールシートの上から凡例シールを貼ってもらいます。

前期高齢者から後期高齢者へと変わる者が発見されます。後期高齢者から超高齢者のシールに変わる人も出てきます。

シールの色が変わること、当然福祉的な課題も見えてきます。現在歩行が苦手な高齢者が車椅子状態になっていること等は容易に想像できます。

一方で、小学生が中高生になり、新しい担い手候補が出現することに気がつきます。それが理解できると、コミュニティでは「子どもLODEで子どもを育てよう」という目標ができます。

「5年後」LODEのイメージ



「5年後のコミュニティ」のシミュレーション作業



## 第2回目LODEワークショップの基本的な手順

### (2) 避難行動要支援者の支援計画検討(班作業)

#### ①【避難行動支援計画の検討:10～20分程度】

◆次の事例のように、コミュニティの中の要支援と思しき方を、発災時に避難支援する方法を検討します。

マンションでの避難行動支援計画検討事例（発災の想定【災害の内容：震度6強の地震。物資の確保等の面から避難所に向かう。】）

住戸No	要支援のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなる人は？
602	意思疎通が不自由（ダウン症）	・垂直避難（下の階） ・外部への避難（避難所）	コミュニケーションをとりながら避難してもらうためのサポートが必要。	2～3人	家族と701のNさん（コミュニケーションが取れる）
803	身体の不自由（心臓にペースメーカー）	・垂直避難（下の階） ・外部への避難（避難所）	ペースメーカーが正常に作動していれば大きな問題はないが、誰かが注意してあげた方がいい。	1～2人	仲が良くても鍵も預かっている別棟のKさん
1007	意思疎通が不自由（外国人）	・垂直避難（下の階）と外部への避難（避難所）	避難所へ避難することの説明をしてあげる必要。場合によっては避難所まで同行避難してあげる必要。	1人	105、106、207、305など（普段からのコミュニケーションが必要）
606	身体の不自由（車椅子）	・自宅避難がベター ・または垂直避難（下の階）と外部への避難（避難所）	万一自宅避難ですまない時には、避難所等へ避難が必要になる。1階まで車椅子で降りることが必要。	4～6人	206、506、607、307
810	身体の不自由（足が不自由） 意思疎通が不自由（認知症） ※要介護認定を受けており、デイサービスへ通っている。	認知症のため、自宅避難が好ましい。外部避難は家族が一緒でないと難しい。	・歩行困難のため、担架が必要。 ・一般の避難所では認知症進行が懸念されるため、可能な限り介護施設などへの避難を考える。	4人	・上下階の住人（710、910）など

#### ②【避難生活支援計画の検討:10～20分程度】

◆次の事例のように、コミュニティの中の要支援と思しき方が、発災時に避難生活を送る上で必要な支援方法を検討します。

避難生活支援計画シート事例（発災の想定【災害の内容と復旧までの想定期間：大震災のため長期間の自宅外避難が必要】）

住戸No	要支援のタイプ	避難の想定	必要になるサポートの内容	必要となるサポーターの人数	サポーターとなる人は？
1丁目1-20-103号	意思疎通が不自由（発達障害：自閉症）	・一時的には中学校へ避難（体育館でなく教室など希望） ・その後専門施設へ移動希望	・人が大勢いるところ、初めていく場所ではパニックを起こすことがある。静かで小さな空間を求めたい。 ・極端な偏食で、コーラとマカロニしか食べない。火を含め常に準備必要。	家族に加えて本人	家族に加えて203の奥さん
1丁目18-2-201号	意思疎通が不自由（発達障害：注意欠陥多動障害）	・一時的には中学校へ避難（他の避難住民に迷惑をかける可能性）	・じっとしていられない。放っておくと走り回るので、他の避難住民の方からクレームが出る。 ・常に体を動かして、適度な疲労感を与える工夫が必要。あるいは作業を与えるなどの工夫も必要。	家族だけでは疲れるので、症状に理解のある人が数人	コミュニティの住人たちに発達障害についての研修講座を開き、人材を育成する必要。

### (3) 要支援者を理解するためのさらに一步進んだ調査

我がLODEチームがもっとも苦労したのは、障害を持った方(とりわけ子ども)が、どのような困難を抱えるのか、その本音がなかなか聞けないということでした。地域のワークショップに障害を持つ方(とりわけ知的障害や精神障害(ともに発達障害を含む)が参加されることはほとんどなかったからです。

そこで、療育施設などに出向き、協力をお願いして、障害を抱える子どもを持つ親にインタビュー調査を実施することとしました。すると徐々に本音が見えてきたのです。

「行政は本音では頼れない。アレルギー避難食など本気で対応してくれていない。」「うちの子は強度の偏食なので、避難所の食事は無理だと思う。自分で用意しておくしかないけれど、備蓄にも限界があるので困っている。」「大勢知らない人がいるとパニックを起こすので、避難所に行くのは無理。」「多動なので避難所では他の方に迷惑をかける。避難所にはいけない。」「うちの子のことを理解してくれている人は周りにいないので避難所で孤立するような気がする。」等々、一般の避難所にはとても行けないという声が多数でした。

皆さんも、下の図をプリントして、障害児を抱えるご家族にインタビュー調査してみてください。これまでは理解できなかった家族の苦労や大変さがより身近に感じられるはずです。

この生の声を聴かないで行政が支援計画を作っても、あまり実効性は無いように思われます。地域が家族に協力して要支援者を守る必要に迫られています。

<p><b>避難行動</b> (発災後、避難所までどうやって逃げるか?)</p>	<p><b>避難所での医療</b> (常用薬や電源や水はあるか、万一の時に医療は受けられるか)</p>	<p><b>避難所での食事</b> (強度の偏食やアレルギーへの対応が可能か)</p>
<p><b>理解者・協力者の確保</b> (症状や特徴について理解してくれる人をどう増やすか)</p>	<p><b>障がいを抱える方やその家族が解決したい課題</b></p>	<p><b>避難所での排泄</b> (トイレに入れるか、オムツはあるか)</p>
<p><b>理解のない人への対応</b> (トラブルが起こった際にどう対応するか)</p>	<p><b>避難所での居場所</b> (寝られるか、パニックを起こさないか)</p>	<p><b>避難所での衛生管理</b> (お風呂に入れるか、着替えはあるか)</p>

質問者と回答者がともにこのチャートを見ながら「お困りごとは無いですか」とヒアリングを進めてください。ご家族は、いろいろお話を聞かせてくれるはずです。

### (4) 一步進んだ「あなたにとって自助とは？」

障害者(家族)に対する質問用のチャート図は、ワークショップに参加する一般住民の方々に対しても使えます。

下記のチャート図は、一般住民に向けたLODEワークショップで、ポストイット作業の代わりに利用できるように考えたものです。

このチャート図は、ワークショップの最後に、確認作業として行うのがいいかもしれません。

14ページで「あなたにとっての自助とは？」と質問するメニューがありますが、そのメニューが冒頭メニューだとしたら、こちらは末尾の締めメニューとなります。

最初、ポストイットに記入した事柄だけでなく、より多くの課題・問題が、下記の調査票の中に記されることになるでしょう。

そして冒頭作業で書き込まれた内容と締めの作業で書き込まれた内容をみんなで比較・確認してください。LODEワークショップによってもたらされる成果を感じていただけるはずです。

このチャートは、曼荼羅構造を利用しています。箇条書きで見るとは、他の項目の存在や項目間の関係などに自然と意識が向けられるのではないのでしょうか。

皆さんも、曼荼羅構造を利用して、様々な企画・計画・調査にトライしてみたいかがでしょうか。

<p>逃げる先、逃げ方</p> 	<p>避難中の居場所・睡眠</p> 	<p>避難中の食事・水</p> 
<p>家族・仲間・協力者</p> 	<p>あなたや家族が抱える困難・課題にどう対応するか</p>	<p>避難中の排泄</p> 
<p>避難中の職場、仕事など</p> 	<p>避難中の薬・医療</p> 	<p>避難中の入浴・着替え</p> 